

三股町子ども・子育て応援プラン  
子ども・若者ヒアリング調査

調査概要と意見整理  
及び計画策定に向けた提案

令和7年2月25日

一般社団法人サステナビリティ・ダイアログ



# 目次

## 三股町子ども・若者ヒアリング調査報告書

目次	2
三股町子ども・若者ヒアリング調査報告書	2
I 調査目的と趣旨	3
II 調査概要	3
1. 調査の目的と背景	3
2. 調査方針及び方法	3
3. 町内の子どもへの調査-小学生	4
(1) 調査項目	4
(2) 調査協力者、調査実施日及び調査実施時間	5
4. 町内の子どもへの調査-中学生	5
(1)調査項目	5
(2)調査協力者、調査実施日及び調査実施時間	6
5. 子ども・若者に関わる現場担当者への調査	6
(1)調査項目	6
(2)調査協力者、調査実施日及び調査実施時間	7
6. 子どもの声の定義について	8
III 小学生ヒアリング調査の結果と考察	9
IV 中学生ヒアリング調査の結果と考察	13
V 考察	20
1. 現場担当者ヒアリングから見えた実践と子どもにみられた変化	20
2. 子どもの変化と大人の関わり方一仮説の整理	24
VI 提案	25

# I 調査目的と趣旨

本調査は、「第1期みまた子ども・子育て応援プラン」の策定にあたり、三股町の子ども達の現状調査及び今後の施策推進の基礎資料とすることを目的とし、子どもに対するアンケート調査では把握できない部分(具体的なエピソード)の「観察的調査」や「ナラティブアプローチ」及び「間接的な質問」を通じたヒアリングを実施した。また、間接調査として三股町における子どもと大人の関わり方の背景を理解する目的で、子どもと普段接している大人たちを通じて間接的に子ども達の姿を浮き彫りにするヒアリングも合わせて実施した。

## II 調査概要

### 1. 調査の目的と背景

本調査は、三股町の子どもたちが「自分の意見を聞いてもらえている」とどの程度感じているのかを把握することを目的に実施した。その背景には、大きく2つの理由がある。

#### ① 数値目標と現状のギャップ

三股町子ども・子育て応援プラン第2章「こども・若者を取り巻く状況」によると、「こども政策に関して自身の意見を聞いてもらえていると思う人」の割合は、全国平均 20.3% に対し、三股町では 14.2% と低い水準にある(こども・若者の意見の政策反映に向けたガイドライン、2024年<sup>1)</sup>)。また、子ども家庭庁は2028年までに、この割合を70%にする目標を掲げている。

三股町としてもこの指標の向上を目指しており、子どもがどのような場面で「聞いてもらえている」と感じるのかを把握することが、数値目標達成のための具体的な施策を検討する上で重要な手がかりとなると考えた。

#### ② 子どもの声を政策と施策に反映する体制づくり

三股町役場福祉課は、「子どもたちの声を政策と施策に反映するための体制を整えたい」という強い意向を持っている。本調査の結果は、子どもの声をどのようにヒアリングし、政策と施策に反映していくのかを検討するための資料として活用されることを想定している。

### 2. 調査方針及び方法

本調査では、子どもたちが「大人に聞かれたから良いことを言わなければ」と感じることなく、自分自身の考えを自由に発言できる環境を重視した。そのため、直接的な質問形式は避け、日常的な関わりの中で聞こえてきた声やエピソードをもとに共通するパターンを見出す方法を採用した。子どもたちと過ごす時間をできる限り確保するようにヒアリングのための時間を長く設定し、そこで得られた意見を考察した。

<sup>1</sup> 以下の文書の1ページの右上の記述を参照した。

[https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic\\_page/field\\_ref\\_resources/98ade0f0-d9dd-43a9-b6c9-7400316f4167/f78107c3/20240321\\_policies\\_iken\\_ikenhanei-guideline\\_06.pdf](https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/98ade0f0-d9dd-43a9-b6c9-7400316f4167/f78107c3/20240321_policies_iken_ikenhanei-guideline_06.pdf)

さらに、子どもたちの声をより多面的に理解するため、子ども・若者と関わる現場担当者（以下「現場担当者」）へのヒアリングも実施した。現場担当者からは、日常の子どもの声や変化が見られたエピソードを収集し、アンケートや直接の問いかけでは把握しきれない具体的な状況を明らかにするとともに、彼らが日々の活動の中で感じ、考えていることについても意見を求めた。

2024年12月11日に実施された子ども子育て会議での中間報告後、委員からの意見を受け、小中学校の教員及び中学生を対象とした追加ヒアリング調査の必要性が認められたことから、2025年2月以降に追加調査を実施した。

中学生へのヒアリング調査では、上記調査方針を踏襲しつつ、生徒が他者への遠慮や大人の期待に影響されにくい環境を整えた。質問者は生徒と近い距離で向かい合って座り、発言だけでなく表情や沈黙といった非言語的な要素も考察の対象とした。

小中学校の教員へのヒアリング調査は、町が中央公民館で隔週火曜日に開催している「教育研究所」の終了後、出席している教員10名を対象に実施した。調査時間は約30分と限られていたため、1対1の個別ヒアリングではなく、グループ形式で意見を収集した。

### 3. 町内の子どもへの調査-小学生

#### (1)調査項目

以下、質問1～4を基本にヒアリング調査を実施した。対象者によって、具体的なエピソードとして聴き取るために追加質問も行った。

三股・蓼池児童館では、調査項目を提示する前に子どもたちが自然に話し始めたため、その流れを妨げないことを優先し、ヒアリング調査の目的説明はあえて行わなかった。一方、梶山・前目・長田児童館では、「『三股町子ども子育て応援プランについて、三股町の子どもたちが安心して暮らしたり学ぶ環境を整えるための計画』を作成していて、みんなにとって意味のある計画につなげるために、みんなのことを知りたい。相談に乗ってほしい」と投げかけた上で、子どもたちの話を促した。

質問番号	主な調査項目
質問1	あなたの学齢を教えてください。
質問2	あなたは、困ったことや嬉しいことがあったときにその話を聴いてくれる人はいますか。誰に聴いてもらうことが多いですか。
質問3	普段あなたが何かを「やってみたい」という気持ちは誰に話しますか。
質問4	もし、あなたが三股町の町長だったら、子どもたちの生活のために何をしたいですか。

#### (2)調査協力者、調査実施日及び調査実施時間

できるだけ多くの児童館で調査を実施する方針のもと、放課後児童クラブのうち5カ所でヒアリングを行った。また、子どもたちのペースに合わせて進めた結果、一人当たりのヒアリング時間は5分から30分と幅があった。

No.	対象の児童館	実施日	児童数	
1	三股小児童クラブ	2024年11月8日(金)	8人	2時間
2	梶山児童館	2024年11月8日(金)	4人	2時間
3	前目児童館	2024年11月14日(木)	4人	1時間15分
4	蓼池児童館	2024年11月14日(木)	2人	1時間15分
5	長田児童館	2024年11月21日(木)	7人	1時間半
合計	5カ所		25人	8時間

## 4. 町内の子どもへの調査-中学生

### (1)調査項目

以下の調査項目を基本にヒアリング調査を実施した。対象者によって、具体的なエピソードを聴き取るために追加質問も行った。

中学生のヒアリング調査では、調査項目を提示する前に 三股町子ども・子育て応援プラン(素案)を示しながら、以下のように呼びかけを行った。

「現在、三股町では、町に暮らす子ども・若者たちが安心して暮らし、学べる環境を整えるための計画を作成しています。この計画を作るにあたり、子ども・若者の声を直接聴くことを大切にしています。今日は皆さんの意見を聞かせていただきたくて来ました。一緒にお話してもいいよ、という方は、放課後学習会の後に少し残って、お話を聞かせてもらえませんか？」

この呼びかけに応じた生徒に対し、以下の調査項目を提示しながらヒアリングを行った。

質問番号	主な調査項目
質問1	何か困ったことや残念なことがあったとき、どうしていますか。
質問2	何かやってみたいことやチャレンジしたいことがあったとき、どうしていますか。
質問3	政策や施策の違いって何だと思えますか。 知っていることがあったら教えてもらえませんか。
質問4	政策や施策についてどのような質問やアンケートがあったら答えたくになりますか。また、どのような機会があったら政策や施策について考えてみたくなりますか。

なお、ヒアリングの流れで、政策評価の実施に関するガイドライン<sup>2</sup>(2005年)を前提に、質問者が政策と施策について追加説明を実施している。

## (2)調査協力者、調査実施日及び調査実施時間

中学生へのヒアリング調査については、町内の中学生に直接ヒアリングを実施できる機会が限られていたため、町に協力を依頼した。

\* 中学1年生及び3年生については、町が中央公民館で実施している「放課後学習会」(中学1年生:毎週水曜日/中学3年生:毎週金曜日)の終了後、ヒアリング協力を呼びかけ、任意で残った生徒に調査を行った。

\* 中学2年生については、町からの助言を受け、演劇ワークショップ「みまた座」(毎週木曜日)に参加している生徒を対象にヒアリング調査を実施した。

No.	実施場所及び対象学年	実施日	児童数	
1	中央公民館 中学1年生	2025年2月5日(水)	6人	1時間10分
2	文化会館 中学2年生	2025年2月6日(木)	2人	30分
3	中央公民館 中学3年生	2025年2月7日(金)	6人	55分
合計	3か所		14人	2時間35分

## 5. 子ども・若者に関わる現場担当者への調査

### (1)調査項目

以下質問1～4を基本に、ヒアリングを実施した。

対象者によって、具体的なエピソードとして聴き取るために、質問を追加した。

現場担当者へのヒアリング調査は、(2)調査協力者、調査実施日及び実施時間の「領域」部分に記載の通り、乳幼児から高校生まで幅広い年代を対象に支援をしている現場担当者を対象とした。ヒアリングの際には、この調査の目的が小学生と中学生を対象にしていることを説明し、回答してもらった。自然の流れで話されるエピソードを抽出することを優先し、回答内容の属性について逐次確認は行わないこととした。

<sup>2</sup> 政策と施策の違い(政策評価の実施に関するガイドライン(2005年))

[https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000152600.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000152600.pdf)

によると、「政策(狭義)」とは、特定の行政課題に対応するための基本的な方針の実現を目的とする行政活動の大きなまとまりであり、「施策」とは上記の「基本的な方針」に基づく具体的な方針の実現を目的とする行政活動のまとまりであり、「政策(狭義)」を実現するための具体的な方策や対策と捉えられるものである。

\* 梶山児童館担当者へのヒアリング調査

梶山児童館における小学生へのヒアリング調査終了後、現場担当者から「子どもとの関わりで、『この子はあれをきっかけに変わったな』と思い出されるエピソードを教えてください。」(質問3)に関するエピソードが語られた。  
これを受け、担当者へのヒアリング調査を実施することとした。

質問番号	主な調査項目
質問1	今の現状をお聴きするために、活動内容について教えてください。
質問2	普段子どもたちと過ごしながら日々感じている彼らの魅力を2つか3つ教えてください。
質問3	子どもとの関わりで、「この子はあれをきっかけに変わったな」と思い出されるエピソードを教えてください。
質問4	子どもの声を「聴く」ってどういうことだと思いますか。

(2)調査協力者、調査実施日及び調査実施時間

No.	対象者	住所	領域	実施日	時間
1	社会福祉法人三股町社会福祉協議会 ゆう学校 内田樹氏	三股町 樺山	地域の居場所 放課後遊び場	2024年 10月23日	1時間
2	三股町民生委員 合同会社 個どもの家くれよん 堂村早百合氏	三股町 蓼池	児童発達支援・放課 後等デイサービス・ 保育所等訪問支援	2024年 10月23日	3時間
3	PARK.Youth & Books & Design 山下朋子氏	三股町 樺山	不登校児学習支援 中高生世代対象	2024年 10月24日	2時間
4	社会福祉法人三股町社会福祉協議会 よる学校 松岡裕美氏	三股町 樺山	地域の居場所	2024年 10月25日	1時間15分
5	社会福祉法人三股町社会福祉協議会 ひる学校 玉木昌子氏	三股町 樺山	フリースクール 小中高生 不登校児対象	2024年 10月29日	1時間15分
6	社会福祉法人三股町社会福祉協議会 もりのこ学習塾 津崎忠文氏	三股町 樺山	不登校児学習支援	2024年 11月7日	2時間
7	三股町子ども子育て支援センター 出水光代氏	三股町 樺山	子育て支援 乳幼児/保護者対象	2024年 11月8日	1時間

No.	対象者	住所	領域	実施日	時間
8	梶山児童館 末吉孝行氏	三股町 梶山	放課後児童クラブ 小学生対象	2024年 11月8日	30分
9	三股町小・中学校校長 会/長田小学校校長 甲斐かおり氏	三股町 長田	教育機関 小中学校	2024年 11月14日	1時間
10	三股町教育研究所 教員10名	中央 公民館	教育機関 小中学校	2025年 2月4日	40分
11	劇団こふく劇場代表 みまた座演劇監督 劇作家・演出家 永山智行氏	文化 会館	演劇ワークショップ 小中高生対象	2025年 2月6日	1時間 30分
合計	20名				15時間 40分

## 6. 子どもの声の定義について

本調査における「子ども・若者の声」は、こども家庭庁こども・若者の意見の政策反映に向けたガイドライン及び当ガイドラインが引用する子どもの権利条約に則り、定義している。具体的に本調査の軸としたのは、以下の部分である。

- 意見とは、論理的に整理された考えだけを指すものではありません。こども基本法の「意見」はこどもの権利条約を踏まえ、より広い気持ちや考えを指しています。「意見」は、原文(英語)では「view(s)」であり、意見を聴かれる子どもの権利委員会一般的意見第12号(2009年)において、言語化された意見のみならず、遊びや身振り、絵を含む非言語のコミュニケーション形態への認識と尊重が必要とされています(こども家庭庁こども・若者の意見の政策反映に向けたガイドライン 2024年<sup>3</sup>、意見を聴かれる権利に関する児童の権利委員会一般的意見第12号 2009年<sup>4</sup>)

### 非言語のコミュニケーション形態への認識と尊重についての考え方

話し手の言葉だけでなく、表情や沈黙などの非言語的要素にも注目することが重要である。なぜなら、同じ言葉であっても、話し手の表情や声のトーンによって意味が変わることがあるからだ。例えば、「一人でできることって限られているし」という言葉も、聴き手の価値観や思い込みによって、前向きにも後ろ向きにも解釈できる。話し手の意図を正しく理解するためには、言葉だけでなく、そのときの表情や話し方に目を向けることが必要である。

また、沈黙も重要なメッセージを含む。沈黙の理由はさまざま

<sup>3</sup> 以下の文書の6ページ「コラム」を参照した

[https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic\\_page/field\\_ref\\_resources/949f4edd-c069-453f-82eb-cd8c565c476b/85e4fdfa/20240220\\_councils\\_shingikai\\_iken\\_senmon\\_949f4edd\\_02.pdf](https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/949f4edd-c069-453f-82eb-cd8c565c476b/85e4fdfa/20240220_councils_shingikai_iken_senmon_949f4edd_02.pdf)

<sup>4</sup> 以下の文書の5ページ、第21項を参照した

[https://www.nichibenren.or.jp/library/ja/kokusai/humanrights\\_library/treaty/data/child\\_gc\\_ja\\_12.pdf](https://www.nichibenren.or.jp/library/ja/kokusai/humanrights_library/treaty/data/child_gc_ja_12.pdf)

- 何かを考えている最中
- 緊張や困惑
- 自分の声を聴こうとしている

などが考えられる。聴き手が沈黙をどう受け止めるかによって、その後の回答が変わる可能性がある。単なる「話されていない時間」として処理するのではなく、沈黙が生まれた背景を尊重し、話し手が本当に伝えなかったことに耳を傾ける姿勢が求められる。

以上を踏まえつつ、町内の子ども(小学生及び中学生)を対象とした調査において、以下の要素を含むものと定義する。

- 子ども自身が直接発言した言葉
- 現場担当者および調査担当者が観察した子どもたちの行動、態度、表情
- 現場担当者の意見のうち、調査担当者が「子どもの意見を代弁している」と判断したもの

### Ⅲ 小学生ヒアリング調査の結果と考察

本章は、結果、考察、ヒアリング(詳細)の順に構成している。最初に結果を提示し、次に調査目的に資するという観点から結果を考察する。最後に結果を導き出したヒアリング(詳細)を記載する。

問2: あなたは、困ったことや嬉しいことがあったときにその話を聴いてくれる人はいますか。誰に聴いてもらうことが多いですか。	
結果	<p>15名が回答した。そのうち14名は「家族」「先生」「友達」「近所の人」など、身近な人に話すと答えた。</p> <p>一方で、4名からは「話しているのにタブレットを触っているのが嫌」「忙しいと言って聞いてくれない」「無視されることがある」といった「聴いてもらえなかった」経験に関する回答があった。</p>
考察	<p>①大人の「忙しさ」が子どもの記憶に残る</p> <p>小学生は、困ったことや嬉しいことがあった際に身近な大人に話す傾向がある。しかし、大人がどのような態度で話を聴いているかを子どもたちはよく見ており、特に「忙しさ」を理由に聴いてもらえなかった経験は記憶に残る可能性がある。</p>
ヒアリング(詳細)	
<p>&lt;小学2年生&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● お母さんとおばあちゃんに聴いてもらう。あとお兄ちゃんによく話すかな。</li> <li>● お母さんと家族に話す。あと、近所の人たちにも話すかな。イヤなことは近所の人には話さない。だって関係ないもん。嬉しいことは近所の人たちにも話すよ。近所のひとたちも「前髪切ったね」とか「今日おだんごでかわいいね」とか細かいことに気づいてくれることがすごく嬉しい。</li> <li>● 3年生とか、4年生とか。あと先生も聞いてくれるかな。でも、時々大人は忙しくて無視することがある。それは嫌だな。</li> </ul>	

- 先生に話す！ちゃんと話を聴いてくれる人に話をしたい。話しているのにタブレットを触ったりしていたら嫌だな。
- 友だちに話す
- 誰にもあんまり話さない
- 先生に話す
- 先生に話す
- 先生に話す！

#### <小学3年生>

- 先生、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんが話を聞いてくれる。ぼくはね、おばあちゃんの家に行くのがいつも楽しみでね、おばあちゃんの家泊まったときはいつもおばあちゃんが話を聞いてくれるんだ。
- 先生に話す！でも今日お腹痛いって言ったら「もういいから」って言われた。大人って本当は忙しくないのに、忙しいって言って話を聞いてくれない。優しく話を聞いてくれる先生がいたらいいのにな。

#### <小学4年生>

- 友だちに話す！ぼくは話すのが好きだから。あと親友にも話すかな。

#### <小学5年生>

- 話すことがないかな。特にお父さんには。でも、お母さんには話す。お父さんは聴いてくれないことが何回もある。
- ぼくは、お母さんがよく聴いてくれる。夜中まで聴いてくれることもあるよ。友だちと仲良くするためにどうしたらいいかな？とか。そういう話を聴いてくれる。

#### <小学6年生>

- 友だちと家族に話すかな。先生にはあんまり話さない。

問3: 普段あなたが何かを「やってみたい」という気持ちは誰に話しますか。

結果

6名が回答した。

- 4名: しばらく沈黙が続き、回答がなかった。
- 1名: 「やってみたいことはあまり話せない」と回答。
- 1名: 「先生」に話すと回答。

考察

②沈黙の意味を聴こうとする大人の態度

問3の質問に対し4名に「しばらく沈黙」する姿が見られた。沈黙にはなんらかの意味があるが、今回の調査中にはこの沈黙が何を意味するのかわかりかねた。子ども声を政策と施策に反映するためには、子どもに話をしてもらえよう場づくりが必要である。現場担当者のヒアリングでも、子どもは本音を話さないというコメントがありつつ、「やってみたい」という話が聞けたと感じる三股町の現場担当者もいる。意見交換など、子どもの声を聴くための工夫が必要である。

ヒアリング(詳細)

#### <小学1年生>

<ul style="list-style-type: none"> <li>● しばらく沈黙</li> </ul> <p>&lt;小学2年生&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● しばらく沈黙</li> <li>● しばらく沈黙</li> <li>● しばらく沈黙</li> </ul> <p>&lt;小学4年生&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● やってみたいことはあんまり話せないかな。ダメって言われそうだし</li> </ul> <p>&lt;小学6年生&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● やってみたいと思ったことは先生に話したかな。最近バドミントンがやりたくて先生がバドミントンをやっていたから話した。</li> </ul>
--

問4:もし、あなたが三股町の町長だったら、子どもたちの生活のために何をしたいですか。	
結果	<p>18名が回答した。</p> <p>回答は、大きく以下の4つのカテゴリーに分けられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 個人の趣味や好きなことに関するもの 「犬を飼う」「スマホを買う」「お菓子を食べる」「ゲームをする」「もっと遊べるようにする」</li> <li>● 他者との関わりや地域のサービス・制度に関するもの 「いじめを止めたい」「いじわるをやめさせる」「SDGsの課題に取り組みたい」「県の偉い人と面白い改革を話し合い、他の町にはない新しいルールを考えたい」「困っている人の話を聞きたい」「助け合いのボランティアをしたい」「長田地区にお店があるといい」</li> <li>● 学校の制度に関するもの 「宿題を減らす」「タブレットを使って新しいものを開発したい」「1日中1つの勉強や体験に没頭できる授業をつくる」</li> <li>● その他 「何もしてほしくない。ずっと寝ていたい。」</li> </ul> <p>一方で、今回のヒアリングでは「なぜそれを必要と感じているのか」という理由までは十分に明らかにならなかった。そのため、一見すると個人的な趣味のように見える回答であっても、背景を深掘りすることで、子どもたちの本質的なニーズがより明確になる可能性がある。</p>
考察	<p>③:子どもの多様な関心と、聴き合う場が開く可能性</p> <p>18名の回答を見ると、子どもたちは「自分のニーズ」「他者との関わり」「地域の環境」「学校の制度」など、日頃から幅広いことを考えていると推察される。こうした意見を理由や背景も含めて聴き合う場を設けることで、子どもたちが政策と施策に興味を持つきっかけにつながる可能性がある。</p>
ヒアリング(詳細)	
<p>&lt;小学2年生&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 犬を百匹飼う。ハムスターとスマホを買う。</li> <li>● 子どものために何もしてほしくない。めんどくさいし。ずっと寝ていたいかな。</li> </ul>	

- おやつを食べ放題にしてほしい。
- まずは美味しいご飯をいっぱい食べられるようになる。あとはスポーツをしたり、お金をあげて、最後死ぬときには「さようなら、生まれてきてくれてありがとう」って言いたいな。
- 仕事をたくさんして、子どもたちにご飯を食べてもらう。長生きするから。生きる力を持つために。
- 宿題をなくす
- お菓子をかってあげる
- ゲームをする。
- もっと遊べるようにする

#### <小学3年生>

- いじめを止めたい。あとは、SDGsの課題を2つくらい取り組んでみたい。今、まちで色んな人が分裂している。そのことにみんなで取り組もうとしているのがSDGsだから。それから身体の不自由な人たちのために取り組みたい。SDGsって、17のゴールがあるんだよ。テレビでSDGsの歌を歌う人たちがいて、それでSDGsのことを知ったんだ。
- 困っている人がいたら、何があったの？って聞きたいな。
- 宿題を減らす。

#### <小学4年生>

- 悪口とか、いじわるすることをやめさせる。
- 長田にお店があると良いな。あとは施設を広げたい。学校もそうだし、やっぱりお店とか。それができたら買い物ができるようになるから！

#### <小学5年生>

- 遊びまくる。お年玉を増やす。
- 児童A: 県の偉い人と話したいな。

質問者の追加質問: へー。どんなこと話したいの？

- 児童A: 例えば子どものこととか、今のこととか。

質問者の追加質問: それって例えばどんなこと？

- 児童A: これから面白い改革をしたらどんなことする？を話し合ってみたい。

質問者の追加質問: 面白い改革ってなんかワクワクするね。どんなことなんだろう？

- 児童A: 他の町にはない、面白いことやルールを作りたいかな。

質問者の追加質問: ルールって例えばどんなルールなの？

- 児童A: 学校は週5日あるけど、1日1つの勉強をずっとできる。僕はプログラミングが好きなんだけど、いろんなことを動かしていくのに1日かけてできたら嬉しい。途中で作業が終わってしまうんじゃなくて、完成させるところまでやりきりたい。それから、歴史が好きだから、昔作っていたものを1日かけて作ったり。石とか削るの大変じゃん。そういうことを体験するのは好きなんだ。

そうそう、タブレットを使って、自分で新しいものを開発したり考えたりもしたい。そうしたら、自分も他の人も楽しめるから。あとは、いっぱい三股に色んな人が来て、東京と同じくらいの人の数になったらいいな。三股って、どこにもなさそうな森があったりメガネ橋とかあるし。三股の場所をみんなが知って話してくれたらうれしいよね。前にね、北海道に旅行に行ったとき出会った人が宮崎の人で、「三股の眼鏡橋すごいね」って話してくれたことがあったんだ。ぼくが町長になったら、はしゃぐ町長になりた

い。そうしたら色々な人に覚えてもらえる。虫が好きな町長、やんちゃな町長の方が色々な人と話せると思う。

- 学校を壊す。行事は楽しいけど、授業はつまらないから。

<小学6年生>

- 助け合いのボランティアをする。最近ダイアナ妃の本を読んでそう思った。困っている人に手を差し伸べたいな。例えば、迷子になった人とか。あとはお年寄りがものを落としたりして、そういう人を助けたいと思っている。

## IV 中学生ヒアリング調査の結果と考察

本章は、結果、考察、ヒアリング(詳細)の順に構成している。最初に結果を提示し、次に調査目的に資するという観点から結果を考察する。最後に結果を導き出したヒアリング(詳細)を記載する。

質問1:何か困ったことや残念なことがあったとき、どうしていますか。	
結果	中学生14名が回答した。 <ul style="list-style-type: none"><li>● 8名:「親」「友達」「先生」など身近な人に「相談する」「話す」と回答。</li><li>● 6名:「寝て忘れる」「買い物に行く」「音楽を聴く」など、相談せずに自分の中で解決しようとする傾向が見られた。</li></ul>
考察	⑤:学年による対応の違い  相談せずに自分の中で解消しようとした6名は 全員が中学3年生であった。このことから、高学年になるほど、困ったことを相談ではなく趣味や好きなことを通じて解消しようとする傾向があると考えられる。
ヒアリング(詳細)	
≪中学1年生≫ (状況:質問を投げかけたあとすぐ、その場にいた生徒6名全員がお互いの言葉に被せるように話し出した。)	
<ul style="list-style-type: none"><li>● 相談する。先生に相談する</li><li>● 友達に話す</li><li>● 相談する</li><li>● 親に話す</li><li>● 友だちに話す</li><li>● 信頼できる大人に話す</li></ul>	
≪中学2年生≫ (状況:質問を投げかけたあと、沈黙があり1人が回答し、それに続いてもう一人の生徒も回答した。)	

- お母さんに愚痴る
- 大人に話すことが多い。スクールカウンセリングの先生。

《中学3年生》

(状況: 質問を投げかけるとすぐに生徒一人ひとりが、一言ずつ回答した。)

- 生徒C: お店とかで食べ物を買ったりする
- 寝て忘れる
- そもそも考えない
- 音楽を聞いている
- 遠出する?
- 生徒A: 壁をなぐる

質問2: 何かやってみたいことやチャレンジしたいことがあったとき、どうしていますか。

結果

中学生14名に対し、質問したところ、6名より回答があった。

- 「小さいことから始める」
- 「親に相談する」
- 「やりたいことはやっている」
- 「生涯学習に参加している」
- 「友だちに相談する」

回答しなかった8名のうち、1年生の4名は質問後、別の話題で盛り上がっていた。3年生の4名は、回答はしなかったものの、話している生徒に頷くなど共感を示していた。

学年ごとの特徴として、

- 中学1年生は、やりたいことが実現できたときのことを想像し、楽しそうに話す姿が印象的だった。
- 中学2年生は、回答までに沈黙が多く、問いに真剣に向き合いながら話す様子が見られた。
- 中学3年生は、進学の話題が出ると、回答していない生徒も大きく頷くなど共感を示し、また「聞いてもらえなかった体験」について話す生徒もいた。

考察	<p>⑥: 高学年になるほど進学に関する話題が優先される傾向 3年生の反応を見ると、進学に関する話題が最優先となり、「やってみたいこと」や「チャレンジしてみたいこと」に意識が向きにくくなる傾向があると考えられる。</p> <p>⑦: 納得いくまで話せた経験が信頼を育む 子どもにとって納得いくまで話しきったという経験が、大人との信頼関係につながると考えられる。一方で、話しきれなかったときのやるせない気持ちを聴いてもらう機会が少なく、その気持ちは解消されないままにしている可能性も考えられる。</p> <p>⑧: 自分が何かに挑戦したい時、話を聞いてもらえる経験の有無により子どもたちの姿勢が異なる</p> <p>生徒Aが、今現在自分が話を聞いてもらえないと話をする一方、生徒Cは、話を聞いてもらえない体験に共感しつつも、それはすでに過去になっている。生徒Cの話は、本来質の異なる話だと感じた。話を聞いてもらえた感がある生徒Cは結果としてやりたいことにチャレンジでき、そうでない生徒Aはチャレンジの手前に止まってしまっているようにも見える。</p>
----	--

ヒアリング(詳細)

《中学1年生》

(状況: 質問を投げかけたあと、それぞれが考えている様子の沈黙が続いた。生徒の一人が、そうそう！聞いて聞いて！といった声のトーンやリズムで、思い出をありありとイメージしながら楽しそうな表情で回答していた。それに続き、もう一人の生徒は、少し照れくさそうに微笑みながら、ゆっくりとしたトーンで回答した。その場にいた生徒6名のうち、4名は質問とは関係ない別の話題で楽しそうに談笑していた。)

- 小さいことから始める。例えば旅行に行きたいときは、まずは家の中でキャンプを試してみたりとかかな。
- わたしは、勉強の本を買いたいときに親に相談するかな。

《中学2年生》

(状況: 質問を投げかけたあと、その場にいた生徒2名とも「どうしている・・・？」とつぶやき、顔を傾け時折お互いの顔を見ながら沈黙した。その後生徒の一人が回答し、2人はお互いの顔を見合わせるなど考えている様子を見せながら沈黙が続いた。その後、もう一人の生徒が回答。そして再度、最初に回答した生徒がこの質問自体に回答することが難しいと回答した。その後、2人が別の会話を始めたため、次の質問へ移った。)

- やりたいこと、やれているしなあ。どうしてるって質問、難しい・・・。
- 何でもやってみているかなあ。生涯学習をやっているじゃないですか。それにいったりしています。茶道教室。第3土曜日にやっているやつ。回覧板で回ってきて、お母さんに言って行くことになりました。値段が高くなければ基本的になんでもやらせてもらえるので。

《中学3年生》

(状況1: 質問を投げかけたあと、生徒Bがすぐに回答。生徒Bの回答に続くように、生徒Cが回答した。両者の話を受けて、生徒Aが発言した。)

- 生徒B 友達に相談する。数学検定を取りたいなと思ったときに、友達も受けんなだったらやろうかな、とかそういうこと。

- 生徒C 親に許可を取る。どこの高校に行きたいとか、高校の部活のこととか、将来やってみたいこととか。
- 生徒A 話聞いてくれていいね。うちは全然聞いてくれない

その時の生徒Aの声のトーンや話し方から、聞いてもらえることにうらやましさを感じていると推察し、追加質問を行った。

質問者の追加質問: どういうときに聞いてくれないと思ったのか

- 生徒A: まあ、話は聞いてくれるけど、質問に対しての答えが違うんだよな。そういう時に壁をなぐる。高校受験の話をしたときに話し合いがすれ違う。話をそらされる。

自分の質問に対して自分が欲しい回答と違う質の回答がきて自分の質問に向き合ってもらえないと感じたときに「壁をなぐるほど」の気持ちとは、怒りや理解されないことへのやり切れなさだろうか。一方で、その時の生徒Aはどこか話を聞いてもらえないことを割り切っているような表情にも見えた。

(状況2: 生徒Aの回答に対し、生徒Nのいる方向へ即座に振り向いて回答を続けた生徒Cからは、生徒Aの話への強い共感が感じられた。その共感をさらに理解するために、質問者は追加質問を行った。生徒Cと質問者のやりとりを聞いていた他の生徒はうなづきが多くみられ、この話への共感が示されたと感じた。

- 生徒C: わかる。うちもそうだった。

質問者の追加質問: 親に反対されたときは、どうしたの?

- 生徒C: 毎日(親と)話した。毎日ケンカ。今でも心配はされるけど... 説得し続けたら(親の方が)折れたなって感じですね。

質問者の追加質問: そのときどんなことを感じたの?

- 生徒C: やっと許してくれたなって感じ。有難いなと思いましたけど。

筆者は、今回のヒアリングの目的には直接関係のない領域だと判断してこれ以上の追加質問をしなかったが、このやりとりで感じたことを考察に記述した。

質問3: 政策や施策の違いって何だと思えますか。知っていることがあったら教えてくださいませんか。

追加質問: 政策と施策を聞いたことがありますか?

結果

中学生13名に対し、質問したところ、以下の回答が得られた。

回答の概要

7名: 「知らない」「初めて聞いた」と回答。

6名: 「聞いたことはあるが、難しいイメージがある」「違いは分からない」と回答。「政策」や「施策」の意味や具体例を知っている生徒はいなかった。

追加質問後、追加質問を行っている時

質問者が「政策」と「施策」の違いを説明すると、全員が以下のような様子で聞いていた。

- ・質問者の近くに立ち上がって集まり、話に集中する
- ・一言一言に頷きながら聴く
- ・頷きながら考え込む様子を見せる

考察	<p>⑨: 子どもたちとまちの政策や施策を考える第一歩</p> <p>三股町内に住む中学生は、「政策」や「施策」に対する認知度が低い。しかし、質問者が具体例を交えて「政策」と「施策」の違いを説明すると、生徒たちは興味深く耳を傾けた。これらの事実から、もし「政策」や「施策」について丁寧に解説する機会や、大人と子どもがともに考える場が設けられれば、子どもたちは自然に興味・関心をもって建設的な議論に参加できる可能性がある。</p> <p>これは、三股町に住む子どもたちが自分たちの意見が実際の政策や施策に反映されることを望む三股町福祉課の方針実現に向け、十分な素地が整っていることを示している。大人と子どもがともに話すことで、町の身近な課題への気づきが生まれ、より具体的な政策や施策の展開に向けた話し合いを始めることができる。</p>
----	--

ヒアリング(詳細)

質問を問いかけている時  
(状況: 質問者が説明している際、生徒たちは上を見ながら考えたり、友達の顔を見てしばらく思案する様子が見られた。)

《中学1年生》

- 言葉は知っていたけどなんか難しそう
- 沈黙。
- ああー。政治のやつか。
- 知らない
- 知らない
- 知らない

《中学2年生》

- 政策は聞いたことあるけど、なんとなく難しいイメージ
- 知らない。

《中学3年生》

- 政策は聞いたことある。けど、施策ってなんだっけ？
- 何が違うの？知らない。
- 施策って施設の何かなのかな。
- 103万円の壁・・・
- そもそも初めて聞いた。

追加説明を行っている時  
(状況: 政策と施策の違いについて質問者が「政策」と「施策」の文字を紙に書き、子ども子育てプランを見せながら具体的な例について話をし、生徒たちの様子を観察した。)

《中学1年生》

それまでは椅子に座って話を聞いていた6名全員が立ち上がって質問者の近くにかげより、質問者の話す一言一言にうなづきながら聞いていた。

《中学2年生》

「へー。施策ってそういう意味なんだ」と、うなづきながら話を聞いていた。

《中学3年生》

その場にいた5名のうち、生徒の一人が「なるほどー」とつぶやき、立って話を聞いていた生徒は、時々顔を上に上げながら、話を租借しようとする素振りが見えた。そのほかの生徒3名も、うなづきながら、考えている様子であった。

質問4: 政策や施策についてどのような質問やアンケートがあったら答えたくになりますか。また、どのような機会があったら政策や施策について考えてみたくなりますか。

<p>結果</p>	<p>中学生14名に対し、質問したところ、回答者は4名で、その内訳は以下の通りである。</p> <p>「政策や施策に関して考えてみたい問い」に関する回答</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●あなたの理想の学校は？</li> <li>●あなたの目標は何ですか？</li> </ul> <p>「質問の仕方」に関する回答</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●アンケートは短くまとまっている方がよい</li> <li>●回答するとき選択肢があるとよい</li> </ul> <p>質問への反応と対話の展開</p> <p>質問4に関しては、回答までに沈黙時間があった。しかし、その間、生徒は「うーん」とつぶやきながら考えたり、質問の意味を理解しようとするような表情を見せ、「目標が何かによるのかな」と言葉にする様子もあった。質問者は、こうした反応から、この問いに対して真剣に考えようとする意思があると感じた。</p> <p>また、生徒同士の対話が生まれ、一問一答形式ではなく、質問の意味を理解し合うやり取りが行われた。回答する生徒の話をじっと聴く姿や、発せられた問いに対して他の生徒が共感し、次々と回答する様子が見られた。</p> <p>具体的には、</p> <p>「体育館にマットを敷いてほしい」</p> <p>「他の学年とも交流したい」</p> <p>「学校帰りに勉強できる場所が欲しい」</p> <p>など、普段感じている課題や提案したいことについて話し合う場面があった。</p>
<p>考察</p>	<p>⑩: 質問を共に考えることで関心が深まる可能性</p> <p>質問者の質問に対して直接回答するような発言が少なかったことを考えると、大人が問いかけたい内容について中学生が興味・関心を持って話してもらうためには、共に「質問」を考え始めることが有効である。共に話すことで、学校生活で感じている課題や、提案したいことを理解できる機会も開かれる。</p>

## ヒアリング(詳細)

### 《中学1年生》

(状況: 問いを投げかけたあと、2人の生徒から続けて回答があった。それを聞いた他の生徒が次々とといと関係がない発言をした。学校の校則や授業内容についての話がだったためか、それぞれの意見に対して「わかるー！」と口に出し共感しながら楽しそうに会話を続けていた。)

- あなたの理想の学校は？とか。
- あなたが1番理想の学校は？とか？

生徒が考えた問いに対して他の生徒の回答内容

- 駅伝嫌だー。
- 冬は寒いので体育館にマットを敷いてほしい
- 他の学年の人と交流したい
- 学校かくれんぼがしたい
- 自分たちで校則を考えたい

### 《中学2年生》

(状況: 問いを投げかけたあと、2名とも沈黙しながらじっと考えていた。生徒の1人が話始めると、もう一人の生徒が回答している生徒の顔をみながらじっと話を聞いていたが、発言はなかった。)

- アンケートだったら長すぎないやつがいいな。短くまとまっているやつとか。今みたいに聞かれても正直何も浮かんでこない。だから、「例えば」という形で選択肢があると答えやすいかも。あとは、1回にいろんなことを聞くんじゃなくて、2～3回に分けて聞くとか。

### 《中学3年生》

(状況: 問いを投げかけたあと、沈黙があった。生徒Cが、自分の頭で質問の意味を理解するように発言すると、隣で聞いていた生徒Dが発言し、その後沈黙があった。質問者が質問の趣旨を再度投げかけると、生徒Aがとその場にいた他の生徒の顔を見ながら、何かをひらめいたような表情で言葉を発した。質問者は、生徒Aの問いかけが質問とは直接関係がないと理解していたが、生徒Aの問いで他の生徒からもどんなことが聞かれるのかに好奇心を持ちその問いをみんなに再確認し、その後は生徒たちの会話に耳を傾けた。)

- 生徒C: 目標が何かによるのかな。例えば政策が勉強関係のことだったら、わたしだったら図書館以外に勉強できる場所があったらいいな。図書館は18時までだから短い。学校が終わってからも勉強できる場所があったらいいのに
- 生徒D: 探求学習の時間とか、今は来る人達が決められていて、その人たちの話を聞くだけだったけど、自分で調べてお願いできたらいいな。もっと別の企業の話を知りたい。

質問者が質問を再確認: 三股に何がよかったらいい？みたいな質問じゃなくて、施策(具体的な計画)のための話をもっとみんなとするために、どんな聞き方だったらいいかな？

- 生徒A: みんなの目標を聞いたらいいいんじゃない？とにかくみんなの目標を聞いて、それを集めて、みんなの意見が重なるところが政策ってことでしょ。だからまずは目標を聞いたらいいいんじゃない？

質問者がAの質問を再確認: もし、「みんなの目標はなんですか」と聞かれたらなんて答える？

## V 考察

### 1. 現場担当者ヒアリングから見えた実践と子どもにみられた変化

ヒアリングの結果から、子どもに対する大人の関わり方(実践)に共通点があると捉え、大人が具体的に行った「実践」とそれによって子どもにどのような変化が生じたかという視点で3つに整理した。根拠となるヒアリングの詳細を続けて記載している。最後に現場担当者と子どもの関係についても考察する。

現場担当者の実践のパターン1	
実践1: 子どもが自分の気持ちや意思を理解する過程での大人の関わり方	
大人が子どもの気持ちや意思を尊重し、粘り強く聴くことで、子ども自身が「なぜそのことをしたくないのかという理由」に気づき、言葉や態度を表明するプロセスを支援すること。	
パターン の詳細	<p>&lt;実践1-1&gt;: 自分の気持ちや意思に自分で気づく過程に寄り添う</p> <ul style="list-style-type: none"><li>❖ 子どもが学校に行きたくないという気持ちを表明した時、子どもの話を聴いたり、一緒に時間を過ごすことでその理由を一緒に探求する。</li></ul> <p>&lt;実践1-2&gt;: 声になるまで待ち続ける聴き方</p> <ul style="list-style-type: none"><li>❖ 「どうしたいの?」と問いを投げかけ続け、子どもが話したいと思うタイミングで話したいだけ話せるように待ち続け、聞き続ける。また、その際、現場担当者が安心する答えが聞かれることを求めない。</li></ul>
子どもに 見られた 変化	<p>本人の意思で「学校へ行くこと」や「ルールを守る」というような意識の変化が見られる。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>❖ 「学校に行かない」と言って動かなかった小学生が、「学校に行く」と言った。</li><li>❖ 放課後児童クラブで気分が優れず飛び出してしまった小学生が、自らの意思でまた児童館に戻って来てくれた。</li></ul>
ヒアリング内容の詳細	
<ul style="list-style-type: none"><li>● 学校に行かなくなったある小学生。必ず朝7時半に家に迎えに行き、一緒に学校に行くようにした。それを3年間続けた。ある日の出来事。「学校に行かない」という彼。よく話を聴いてみると朝ごはんを食べていなかったことが分かる。その子を車に乗せて一緒にコンビニへ向かう。そこでパンを買って一緒に食べ、「お腹いっぱいになった?学校に行くか?」と聞くと「学校に行く」と言った。そうしたことの繰り返しで子どもとの関係性は変わっていくのだと思う。</li><li>● ある日、こたつの中にもぐりこんだ彼を、引っ張りだすのではなく、一緒にもぐりこんで、「どうしたいの?」と耳元でただ投げかけ続ける。そうすると、「宿題をやれていない、あれをしていない、これをしていない」という声がだんだんと聞こえ始める。行きたくない理由が見えてきたので、あとは一緒に宿題をやってあげることで、学校に行くようになる。ということがあった。</li><li>● 転校してきたばかりで「前の学校に戻りたい」と話をしてくれた子がいた。その子はなかなか友達ができないということに悩んでいる様子であった。ある日の放課後も、気分がすぐれないなどで飛び出してしまった。その時、彼の後をそっと追いかけて行</li></ul>	

き、様子を見守っていた。彼が落ち着くまで待っていると、何が嫌だったのかという話を話してくれた。話をひと通り聴いたら、話したいことを話しきったのか、落ち着いた様子になり、自らの意志でまた児童館に戻ってきてくれたことがあった。

## 現場担当者の実践のパターン2

### 実践2: 子どもの自己肯定感を育むための関わり方

大人が子どもたちと良好な関係を築きたいという意味(内面的な動機)を持ち、時には複数の大人が共に子どもを観察することを通じて子どもの変化や普段の言動を肯定的に受け止める。そして認識したことを言葉で共有したり行動で示したりし、また子どもを観察する。そういった実践が積み重なることで子どもの主体性を育む基盤を形成するきっかけにつながる。

#### パターン の詳細

<実践2-1>: 子どもの変化や成長、言動を肯定的に受け止める観察の目

- ❖ 子どもの変化や成長を捉えたいという気持ちや、見逃したくないという気持ちから「観察」を通して子どもの変化や傾向に気づいているという点で共通している。つまり、子どもが何をしたいか知るために大人は子どもの様子を継続的に観察していると考えられる。

<実践2-2>: 観察を通じて得た気づきを、行動や言葉でフィードバックする

- ❖ 「あえてミスして、「まあいっか」と言っている姿を見せてあげる」「場所見知りをしている子には「はずかしいね」と声をかけながら見守る」「地域の輪に入りたそうな子に「ここまで来たなら、おいでよ」と声をかける」「面白い発想だね。みんなはどんな風に見えた？」といったエピソードには、観察を通して見つけた考察を言葉や行動でフィードバックしているという点で共通している。大人は子どもがどこで立ち止まっているかを見つけ、その時の子どもの気持ちを言葉にしたり、肯定的な声かけを続けている。

<実践2-3>: 子どもたちと良好な関係を築きたいという大人の意味

- ❖ 子どもに一方的に教えるという関係性ではなく、子どもと大人がともに健やかな関係であることを願う大人の意味が基盤にあることが、信頼関係を深めるきっかけにつながる。

#### 子どもに 見られた 変化

できなかったことが出来るようになる、他者と積極的に関わり始めるといった行動の変化が見られた。

- ❖ 一番じゃないと嫌、勝たないと嫌というこだわりがあったが、「まあいっか」と気持ちを切り替えられるようになった。さらに、失敗が気になる他の子どもたちに対しても、「大丈夫だよ、次もう一回やってみよう」と声をかけられるようになった。
- ❖ センターに初めて来た時は、お母さんの後ろに隠れて場所見知りをしていたお子さんが、次第に自ら進んで部屋の中に入って遊ぶようになった。
- ❖ 出会った頃は、表情もなくあまり話すことのなかった子が自分の気持ちと向き合えるようになった。
- ❖ 手遊びしていた子も、その話題になったときは振り向いて話を聞いていた。

	<ul style="list-style-type: none"> <li>❖ 注意をすると学校を休む子が、あるとき何かが変わったのか、テストの点数もアップして、現場担当者と子どもの関係が、お互いに大好きだと感じられる関係に変わった。</li> <li>❖ 最初の頃は場をわかまえるように大人の様子を伺ったり、模範解答のようなことを言う子が、やりたいことを言ったり、やりたいことをやるようになった。</li> </ul>
--	---

## ヒアリング内容の詳細

### 《実践2-1》

- 子どもって具体的なことは表現できないこともあるけど、それが遊びの中で分かることもある。例えば、子どもたちの様子を見てみると、強いストレスがかかったときは、すごく狭くて深い穴を掘っていたこともあった。遊びの中でぼろぼろ話してくれたりもした。困っていても直接「困っている」と言う子は少ない。
- 子どもって自分が悩んでいることは簡単に出さない。だから、関係を続けていく中で、本人の方から打ち明けてくれるまで待つ。その時に大事にしていることは、子どもの不安定さを見逃さないということ。口調だったり、表情だったり。そういうところにサインがあるから。
- 出会った頃は表情もなく、あまり話すことがなかった子が、ある日、学校の横を通ったとき、「みんなは学校で頑張っているのに、わたしはここで過ごしていいのだろうか」と罪悪感を感じていることを話してくれた。その姿を見て、自分の気持ちと向き合えるようになったんだという成長を感じた。
- センターに初めて来たときは、お母さんの後ろに隠れて場所見知りをしていたお子さんが、次第に自ら進んで部屋の中に入って遊ぶようになった。例えば、センターに来て、滑り台を滑ることができたとき、パッとお母さんの顔を見る。その様子から、きっと自分ができたことをお母さんに見てほしいんだろうなということを感じた。

### 《実践2-2》

- 一番じゃないと嫌、勝たないと嫌だというこだわりがあった子に対し、先生たちがあえてミスをして「まあいっか」という姿を見せてあげるようにしている。そうするとだんだんと失敗しても「まあいっか」と言えるようになる。さらに、失敗が気になる他の子どもたちに対しても、「大丈夫だよ、次もう一回やってみよう」と声をかけるようになった。
- 子どもたちの発想が面白い。例えば漢字を習ったときに、ある子は「彡」をいわゆる「さんずい」とは見ないで、縦線がいくつとか、記号としてみたり、ビックリマークに見えていたりした。そのことを「面白い発想だね」と伝え、さらに「みんなはどんなふうに見えている？」と尋ねてみたりもした。そうするとみんな楽しそうに聞いていた。手遊びしていた子も、その話題になったときは振り向いて話を聞いていた。子どもから出た発想の方が子どもの興味を引くんだなと思った。子ども同士でやり取りしている時の方が楽しそうにしている。
- 子どもたちは表情や行動で示すことが多い。最初はお母さんのうしろに隠れたりして場所見知りをすることもあった。そういうときは「はずかしいね」と声をかけながら、見守ったり、待つということをしている。泣いているときは、「どうして泣いているのかな？」を観察して、考えて、言葉にしたりしている。

### ＜実践2-3＞

- 最初はわたしにとってもストレスでしかなかったんです。その子に対して注意をすると、学校を休んだり。でも、ずっとその子に忍耐強く言い続けていたら、あるとき、何か

が変わったんです。テストの点数もアップして。今ではお互いに大好きな関係になった。

- 子どもたちと1対1の関係だと、「わたしが言っても仕方ない・・・」と思うときがある。自分がしんどくなるときもあるという自分の都合もある。子どもたちといい関係性を築くうえで私たち(教員)も健やかであることが大事。だから、他の先生と、生徒のことをたくさん話すようにしている。他の先生と共有して、相談して、複数の大人が関わって子どもたちを見るようにしている。
- 子どもは、最初の頃はすごく場をわきまえようとする。大人なわけでないけど、すごく大人の様子を見ている。それは、学校だったり、大人に接するときに構える感じとか。あとは模範解答のようなことを言ったり。どこかで正解を言わなきゃと感じているんだろうとすごく感じる。みんなが普段教室でどんな顔をしているか分からないけれど、保育園から小学校にかけて、ある意味社会性を身に付けている。でも、この社会性って自分で見つけたものではない。「これがルールです」「これを守りなさい、静かにしなさい、こうしなさい」ということを教えられて、身に付いたもの。それは、人との関係の中ややり取りの中、その人との関わりの中で知っていったものとは違う。それぞれが「ルール」というプラカードをもって接しているようなイメージ。でも本来は、「これをしたらだめ」といったルールは相手との関わりの中でできていくものであって、先にルールやマニュアルがあると関係性をつくりづらい。だから、人との関係性において、間合いをはかるということを大事にしている。あとは、先回りしないようにしている。相手との関係性の中でゆっくりいく。そうやって時間を重ねるうちに模範解答のようなことを言うことがなくなっていく。それこそ、言いたいことだったり、やりたい事やったりね。

### 現場担当者の実践のパターン3

#### 実践3: 子どもが興味関心や得意なことに気づくための機会の提供

子どもの「やりたい気持ち」をくみ取り、選択肢を広げる機会を大人が提供することで、子どもが自分の可能性に気づききっかけを得ていること。

<p>パターン の詳細</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>❖ 普段の暮らしでは体験できないことを体験できる環境をつくる。</li> <li>❖ 子どもの「やりたい」気持ちや声をくみ取り、実現するための機会を大人がつくっている。</li> </ul>
<p>子どもに 見られた 変化</p>	<p>新しいことに好奇心を示し、それを自らやり始めるといった行動の変化が見られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>❖ 誰が一番上手に焼けるかという遊びが始まった</li> <li>❖ 自分の言葉でお礼を伝えたいという意思を示すようになった</li> <li>❖ 「通信の学校に行く」と自分で進路を決めた</li> <li>❖ 大人がやることを決めなくても、自分たちで遊びをつくるようになった</li> </ul>

#### ヒアリング内容の詳細

- パンフレットを置いたり、スタッフの会話が自然と耳に入る環境をつくることで、ある日「通信の学校に行く」と自分で決めた子もいる。
- 地域ボランティアさんが竹を持ってきてくれたり、焚火が好きなおじちゃんが焚火を始めると、「モチ焼いてー！」とかけてよってくることも。モチを焼き始めると、誰が一番

上手に焼けるかという遊びがはじまったり。大人がやることを決めなくても、子どもたちは自分たちで遊びをつくっていく。

- 「本屋を見学しに行きたい！」と言った流れで田中書店に行くことになった。そうするとお礼を自分の言葉で言いたいと自分の意思を示すようになった。
- 自然活動の中で、やりたいようにやることを受け止めていると大人がやることを決めなくても、だんだん自分たちで遊ぶようになった。

## 2. 子どもの変化と大人の関わり方—仮説の整理

「現場担当者の実践と子どもの変化」の因果関係を明確にするには、今後さらなる調査が必要である。しかし、本調査の結果をもとにいくつかの仮説を示すことで、子どもの声を聴く体制に関わる大人たちの議論を深めるための基盤となればと考え、以下のように整理する。

子どもに対する大人の主体的な関わりは、子どもが自分の「やりたいこと」に気づき、それを実現するプロセスに影響を与えている。その関わりの中で、大人は「子どもがその人らしく成長すること」を願い、主体性を持って関わり続けている。

本調査の範囲では、すべての子どもが「やりたいこと」を主体的に実現したとは言い切れない。大人の働きかけの影響が大きい側面もある。一方で、子ども自身が主体的に行動し、「やりたいこと」を実現しようとした例も見られた(実践3参照)。つまり、三股町では共主体的な体験<sup>5</sup>を支える一定の取り組みが、子どもの気持ちや意思に寄り添う形で展開されつつあるといえる。

この可能性を踏まえ、三股町における大人の関わり方が、より本質的に子どもの声を聴く方向へと発展していくことを期待し、次の章で提案を2つ示す。

## VI 提案

本章は、これまでの考察を踏まえ、こども政策に関して自身の意見を聞いてもらっていると子どもがより思える三股町になるために、今から始められることという観点から2つ提案する。

### ①子どもの話を聴くスキルを磨き合う機会の創出

日常的に子どもと関わる大人(親、教員、子どもに関わる事業者など)が、子どもの話をどのように聴いているかを共有しながら、関わり方を磨く機会を設けることを提案する。

#### 子どもの声に出会うために必要なスキル

ヒアリング調査の結果、子どもが「やってみたい」と思う気持ちに大人が出会うためには、大人の聴き方や関わり方が大きく影響していると考えられる。特に、以下の2つのスキルが重要である。

<sup>5</sup> ここでいう共主体的な体験とは、子どもが大人の力を借りながら自分が「やりたいこと」を実現する体験であり、大人自身もその支援を通じて「子どもの力になりたい」という気持ちや、「子どもと良い関係を構築したい」という気持ちが実現する体験である。「生活や活動の中で葛藤や対話を重ね、折り合える方法を探る。その過程でみんなの主体性が混じり合って行きます。これが『共主体』です。(参照:子どもが中心の『共主体』の保育へ—おまめうだひろとも著、大豆生田啓友監修より)

1. 子どもが話したいことを話せるよう、適切な問いを投げかけるスキル
2. 言葉になるまで聴き続けるスキル

## 現場の課題

子どもと関わる現場には「1対1で寄り添う環境」と「1対複数で向き合う環境」があることに留意する必要がある。学校関係者へのヒアリングでは、「教育相談の時間があるが、1人1分～2分ずつしか話せない」という課題が挙げられた。1人の教員が20～30人を担当する環境では、子ども一人ひとりに十分に寄り添うことが難しい状況も想定される。そのため、それぞれの現場に即した実践的なスキルが求められる。

## 大人同士がスキルを磨き合うことを目的とした交流の場の必要性

このような状況を踏まえ、日常的に子どもと関わる大人（親、教員、子どもに関わる事業者など）同士が、子どもの話を聴くスキルを磨き合う機会を設けることを提案する。三股町にはすでに優れた実践があることがこのヒアリング調査で明らかにされつつあるため、現場で生きる実践をお互いに学びあうことができる。

## ②子どもの声を政策や施策に反映するための仕組み

子どもが「自分の声が政策や施策に反映されている」と実感できる環境をつくるため、1年間を通じたワークショップの開催を提案する。さらに、ワークショップで得られた意見を政策や施策に反映させるために、三股町の大人と子どもがともに共有ビジョンを策定することを目指す。

## 現場の課題と可能性

現在、三股町の「子ども政策に関して自身の意見を聞いてもらえていると思う人の割合」は14%と低く、国として2028年までに70%に引き上げる目標がある。この目標を達成するためには、単発の取り組みではなく、相乗効果を生む継続的な事業展開が必要である。

また、大人が「子どもの声を政策や施策に反映した」と周知することと、子ども自身が「自分の声が政策や施策に反映されている」と実感することには大きなギャップがある。この認識のズレを解消する仕組みが求められる。

一方、ヒアリング調査において、大人の関わり方によっては、子どもたちの好奇心や考える力を引き出し、政策や施策へ意見を反映することは可能であるという手応えもあった。

## 大人と子どもが学び合い、協力できる場の必要性

このような状況を踏まえ、子どもの声を聴こうとする大人と子どもがともに「意見が政策や施策に反映されるとはどういうことか」を学び合う機会が必要である。

また、町民全体の意識を高めながら、子どもと大人が協力し合える共有ビジョンを策定することで、このテーマを「自分ごと」として捉え、継続的に取り組む人材を育てる仕組みを構築することが求められる。